

『モアナ 南海の歓喜』と『パパラギ』と『パパラギソング』(CD文庫)について

* 1920年代——それは1918年に第一次世界大戦が終結し、1939年に第2次大戦が勃発するまでの、東の間おだやかな時代でした。当時、欧州で1冊の本と1編の記録映画が公開されました。本は、進みすぎた文明への警鐘を鳴らすサモアの首長ツイアビの演説集『**パパラギ**』、映画は古くからの島の豊かな生活を活写する『**モアナ 南海の歓喜**』です。

* 『パパラギ』は一時忘れられましたが、1970年代にドイツ語版が刊行されると同時に評判を呼び、フランス語版、オランダ語版など欧州各国版になり、日本語版発売は1981年、90年代には百万部を超えるロングセラーになりました。

* 『モアナ 南海の歓喜』は、ドキュメンタリー映画の父とされるロバート・フラハティ監督作品で、1926年公開、無声記録映画の傑作と称えられました。その約半世紀後の1980年、ロバートの娘モニカ・フラハティが島を訪れ、波音や踊りのための歌声、太鼓の響きなどを採録し、父の作品をサウンド版としてよみがえらせました。完成した父娘合作のサウンド版『モアナ 南海の歓喜』は、2014年に世界公開され、日本公開は2018年9月岩波ホールを皮切りに、目下全国に広がっています。

* じつは、『モアナ 南海の歓喜』サウンド版公開に際して、思いがけない事実が判明しました。それは、撮影の舞台になった島が西サモアのサバイイ島であったこと、そして、『パパラギ』の演説をした首長は、サバイイ島のすぐとなりのウポル島の住民であったこと——です。これはまた、なんとという不思議な偶然でしょうか♪

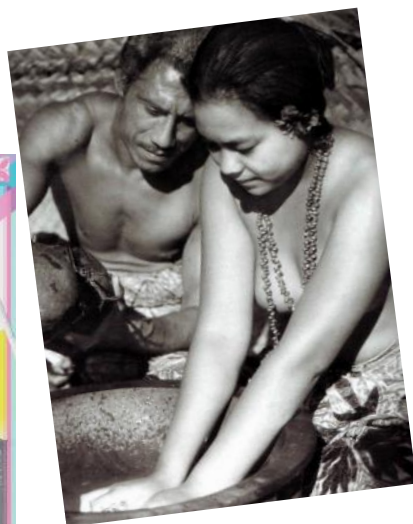
* 『パパラギ』では、欧州を旅したひとりの感覚鋭敏な首長が島へ帰り、住民に「あんなふうになるのは止そう。私たちは今のままでじゅうぶん幸せだから」と説きます。映画『モアナ 南海の歓喜』では、「じゅうぶん幸せな」島の生活が、ゆったりと美しく描かれています。1冊の本が先端文明を厳しく批評し、1本の映画がそのアンサーソングを歌う——2者は1対となって過去を検証し、未来を予言するのです。

* もうひとつ、お知らせしたいことがあります。昨年の冬、1980年代に歌われた一連の『**パパラギソング**』がCD文庫になってよみがえりました。伝説のフォークシンガーとして名を残す笠木透さんが、日本語版『パパラギ』に感激して作詞し、作曲家・ピアニストの安達元彦さんが作曲した12曲の歌たちが、笠木さんの遺志を継いだラウラウの会によって復活したのです——ご用意したCD文庫『パパラギソング』を、どうぞお手に取ってみてください♪

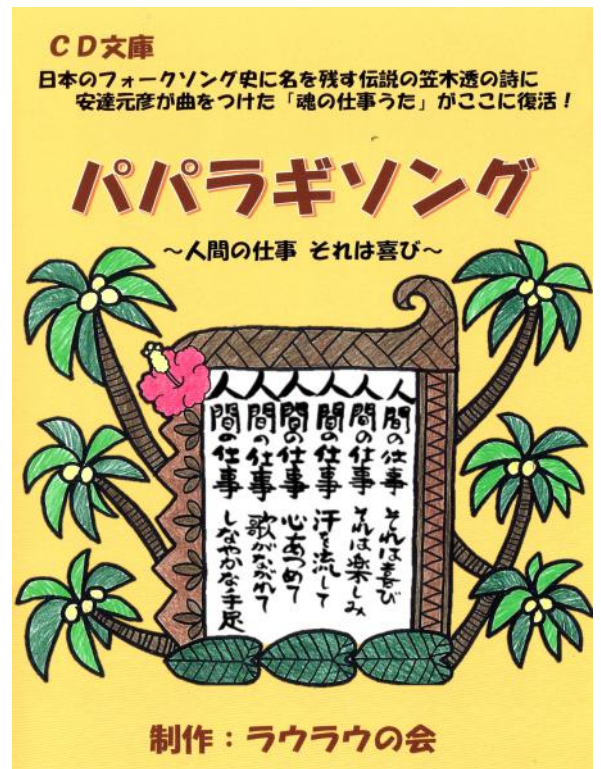
* 2作品が生まれたウポル島とサバイイ島は、現在「サモア独立国」に属しています。島の人びとは、進んだ文明を受け入れながら、一方でなお海風の吹き抜ける家を愛し、裸足でヤシの木に登り、伝統的な婚礼の太鼓をたたきます。日本もまた、島の国です。けれども今、北海道から沖縄に至る島々で、幸せの笑顔はどれだけ見られるでしょうか——地球規模の閉塞状況下で悶えるわたしたちは、島からのいにしへの風の歌に耳傾けねばならないとおもいます♪ (解説:ラウラウの会・松田悠八)



← 日本語初版は1981年(立風書房刊)、現在SB文庫所蔵。副題は、「はじめて文明を見た南海の首長ツイアビの演説集」。発売当初、評論家の秋山ちえ子さんがTBSラジオ「談話室」で何度も読んだり、作家の落合恵子さんが講演で話したり、フォークシンガーの笠木透さんが歌ったりして部数を伸ばした



← ↑ 『モアナ南海の歓喜』。R・フラハティ監督は1923年、サモアのサバイイ島で本作品を撮影した



↑ CD文庫『パパラギソング』
 税込定価:1,000円 制作:ラウラウの会
 〒182-0024 東京都調布市布田1-10-5
 稲毛家ビル2階 クッキングハウス
 TEL&FAX: 042-498-5177
 HP: <https://papalagi2018.web.fc2.com/>

